

会津自然エネルギー機構の取り組み

<活動理念>

2011年7月、まだ被災地全体が混沌としていた時期、「原子力から自然エネルギーへ」というテーマで緊急シンポジウムを開催した。過酷な災禍をもたらす原子力発電をこれ上続けるわけにはいかない。その代わりとして、化石燃料ではなく、再生可能な自然エネルギーへの転換が必要だと考えた人たちが、集い、語り、仲間を増やし、「会津自然エネルギー機構」が生まれた。

「会津自然エネルギー機構」は、原子力という誰かを犠牲にしなければ成り立たない仕組みから脱却して、地域分散型によるエネルギーの自立を掲げ、とりわけ会津の豊かな森林資源の有効な活用を目指して、荒廃した山林の保全と活用のための仕組みづくりを模索している。

<主な活動>

山学校

荒廃した山を動かすための課題は山積しているが、とりわけ林業に従事する技術者不足の改善にむけて、木こりの技術体験講座「山学校」を開催。今年で3年目を迎えた。

三島町の杉林を主な体験場に、チェーンソーの刃研ぎ、使い方から間伐の実際、玉伐り等々、実際の現場で技術習得を目指している。

伐採実習







＜配布資料＞

- チェーンソー取り扱いの基礎知識
- 伐採の基礎と薪づくり
- かかり木処理と特殊伐採

＜伐採木の利用＞

薪ストーブ用燃料として、各自が持ち帰り活用。

山主が製材して冬囲いの板として使用

＜今後の課題＞

1. 危険な伐採技術の習得には、山での多様な経験知間を積上げ、様々な場面への対応が瞬時に求められるが、現場での実地的な作業にはいまだ至ってはいない。
2. 実際の作業に従事できる熟練の技術者の育成が急務である。
山学校に地元の農林高校の林業科の先生および生徒が参加し、将来林業分野で仕事を希望する生徒が出てきたことはひとつの成果といえる。
3. 大規模な伐採（チップ、パルプ用）には高性能機械の導入が不可欠であるが、資金的な壁は高い。
4. 山林所有者の特定が困難になっていて、間伐も思うにまかせない箇所が多い。
5. 伐採木の出口がない。現在会津地域でバイオマス発電所が稼働しているが、材木を持ち込んでも手間に十分見合う料金体系にはなっていない。
6. 林業従事者には、その仕事に見合った賃金が支払われるようにならないと林業の振興には結びつかない。そのためには、木材の良い部分は建築分野で利用し、残った部分をバイオマス燃料として活用するという仕組みが必要。

＜今後の取り組み＞

会津管内の林業関係者・地方行政が連携して、林業従事者の育成と生活保障をしつつ、山林全体の保全を図る取り組みにむけて働きかけたい。